



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「のに」・「ながら」・「ものの」・「けれども」の使い分けについて
Author(s)	池上, 素子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 1, 18-38
Issue Date	1997-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45548
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC001_003.pdf



「のに」・「ながら」・「ものの」・ 「けれども」の使い分けについて

池 上 素 子

要 旨

逆接確定条件を表す接続助詞「のに」「ながら」「ものの」「けれども」を取り上げ、それらの使い分けの条件を考えつつ各々の意味と用法を考える。最後に焦点化を基準として四つの助詞の相互関係をまとめる。

「ながら」には大きく分けて2つの用法がある。一つは「のに」の用法に近く、今ひとつは「ものの」の用法に近い。便宜上、前者を「ながらA」、後者を「ながらB」と呼ぶ。「けれども」は必ずしも評価を伴わないという点は異なるが、それ以外の点では「ものの」「ながらB」に近い。

又、今尾(1994)の方法を援用して、強調、質問、修正という視点から、各々の焦点がどこにあるかを検証する。その結果、「のに」「ながらA」は前件に焦点を置き、「ながらB」「ものの」「けれども」は後件に焦点を置いていることを示し、上記の分類(即ち「ながらA」と「のに」、「ながらB」と「ものの」「けれども」が各々近いということ)の妥当性を確認する。

〔キーワード〕「ながらA/B」、主観、累加、評価、焦点化

1. はじめに

日本語の文のタイプの一つに複文がある。複文は、一つの中核的な節、即ち主節と、それに依存、従属していく節、即ち従属節から成る。小稿で取りあげる「のに」「ながら」「ものの」「けれども」は、この複文の主節と従属節を結びつける働きをする接続助詞である。

- (1) あんなにお金があるのに貸してくれない。
- (2) 知っていながら知らないふりをする。
- (3) 昼間は暖かいものの、夜はまだ寒い。
- (4) 彼はまだ大学生だけれども、もう結婚しています。

これらはいずれも、既定の事柄を述べている前件（従属節）と、それとは内容的に対立する事柄を述べている後件（主節）を結びつける、いわゆる逆接確定条件を表す接続助詞である。（「ながら」については、別の意味もあるが、それについては「ながら」の項で述べる。）その意味で、4つとも同じ部類に属する助詞ではあるが、必ずしも同じように使えるわけではないことが、以下の文からもわかる。

(5) ?雨が降っているものの、傘を持っていません。

(6) *勉強しながら、全然上手にならない。

(5) (6) は日本語を学んでいる留學生が作ったものだが、どちらも自然な文とは言えないだろう。（以下、非常に不自然だと思われる文には*を、些か不自然だと思われる文に?をつけることとする。）しかし(5) (6) を次のように言い換えれば自然な文になる。

(7) 雨が降っているけれども、傘を持っていません。

(8) こんなに勉強していながら、全然上手にならない。

(8') 勉強しているのに、全然上手にならない。

では、その使い分けの基準は何なのであろうか。小稿では、これら4つの助詞「のに」「ながら」「ものの」「けれども」を取り上げ、それぞれの意味と用法を考えると共に、それらの使い分けの基準を考えてみたいと思う。

2. 各論

2.1 のに

「XのにY」という構文は、「Xという状況設定があつて、それを根拠として「Xだから当然Yだ」という理論の流れを否定し」（森田1988:441）、「期待に反することがらに対する話者の気持ち」（今尾1994:97）、具体的には、意外、非難、遺憾、不満、不本意、称賛などを表す。実際には非難、遺憾などマイナス評価のものが多く称賛は少ない。

(9) 冬なのに桜が咲いている。（意外）

(10) 皆が働いているのに、一人だけ遊んでいるなんて。（非難）

(11) ずいぶんがんばったのになあ。（遺憾）

(12) 私にだってできるのにやらせてくれない。（不満）

(13) 若いのに偉いなあ。（称賛）

上に上げた例は、先行研究で取り上げられているものである。（+）で評価した前件から考えて、当然（+）の事柄が起こるであろうと期待したが（-）

の結果に終わる場合((10)(11)(12))、逆に(一)にとらえた前件から考えて、当然(一)の事柄が起こるであろうと予想したが(+)の結果が出る場合((13))、或いはそう言った評価とは無関係な場合((9))とあるが、もう一つ、「累加」の用法がある。

(14)こんなに親切に頂いたのに、その上お土産まで頂いてしまつて…

(15)妻を病気で失ったのに、更に財産までなくしてしまった。

(14)は、(+)で評価した前件の上に更に(予想に反して)(+)の事柄が重なるという状態を述べて意外、感謝を表し、(15)は(一)で評価した前件の上に(一)の事柄が重なる状態を述べて不満、不本意を表している。「～だけでもありがたいのにその上～」、あるいは逆に「～だけでも嫌なのにおまけに～」という意味で、肯定的及び否定的累加と言って良いと思う。このように、「のに」の特徴は、必ず何らかの話者の主観を色濃く表すということであろう。従って、中立叙述的な対比を示す文で「のに」を使うと不自然になる。

(16)?夏は京都へ行つたのに冬は九州へ行く。

更に、「のに」で結ばれる事柄は、ともに現実のこと(現在か過去)に立脚した事実か判断である(森田1980:384)、つまり「前件と後件がともに事実として確定している」(前田1995:503)ため、後件には推量、意志、願望、命令などはこない。

(17)*冬なのに桜が咲いているだろう。

(18)*みんなが働いているのに、私だけ遊ぼう。

「のに」の後件には、いわゆる人称制限はないが、実際には(特に現在形の場合)一人称が主語になることは少ない。これは述語が動詞である文の場合、主語が一人称だと、意志を表してしまうため非文になるという構文上の問題と((19)(19')参照)、強い非難、意外などを示すという意味特徴とそぐわない、という二つの理由によるものであろう。前田(1995:501)は動詞文の例は挙げていないが、下の(20)の例をあげ、「嫌いなことがある」時に「楽しい」と自分が感じるという逆接的な現実(それ自体はあってもおかしくない事態である)に対して、意外だとか驚いているとか違和感を感じるとかを述べる文であれば、ノニは適切になる」として、適切になった文として(20')を挙げている。

(19)*私は、熱があるのに行く。(意志)

(19')彼は、熱があるのに行くそうだ。

(20) *嫌いなことがあるのに楽しいです。(前田1995:501)

(20')でも、それが楽しみでもあるのね。追っかけ回している
ような感じなのに、それが楽しいなんて、自分でも変なの。

(前田1995:501)

2.2 ながら

「ながら」には、「コーヒーを飲みながら新聞を読む」のような同一主体の動作の同時進行の使い方もある。しかしながら、ここでは、「動詞、動詞＋ているの連用形、形容詞の連体形、形容動詞や副詞の語幹、体言、「～ない」などについて、その状態や状況にふさわしくない事態や事柄が同時に存することを示す」(森田1980:357) 逆接の「ながら」のみを扱う。

南(1974:128)は文接続における前件の独立度という観点から、接続表現を4段階に分類している。そこで同時進行の「ながら」はより事柄的、つまり、より独立度の低いA類、逆接の「ながら」はやや陳述的、つまり文としての独立度のやや高いB類となっており、構文上両者は分けられるとしている。しかし、森田(1980:357)も指摘しているように、「同時進行と解するか逆接と解するかは微妙で、両者は本質的な違いではない。」要するに、順接であっても逆接であっても、二つの事柄が同時に存在するというを示すのが「ながら」の基本的な用法である。

逆接の「ながら」は、「現実(現在または過去)に二つの相反する事柄が並存する状態を観察し描写する言い方なので、主語は第三者である場合が多く」(Makino and Tsutsui 1995:202)、また後件に推量、意志、依頼、命令は来ない((21)参照)。前件と後件の主体は原則として同一である。

(21) * (私は) お金がありながらけちけちしよう。

江田(1985)は、「ながら」を「ながら」「～ていながら」「～ておきながら」「～(であり)ながら」「ながらも」に分けて、それぞれ説明しているが、ここでは、「ながら」の用法は、大きく二つに分けて検討することにする。まず、(1)主体PがXという動作をしている、またはXという状態にあるとき、普通ならPはYをする、またはYになるはずなのにそうならないことを示し、そのことに対して意外、非難、遺憾、不満、不本意、称賛といった感情を表明する場合。(2)話者が前件の状態Xをマイナス(またはプラス)の評価を表すものとしてとらえつつ、しかし同時に一

方で、Xに関連した事柄、(又はX自身)には、Yというプラス(またはマイナス)の面もあることを示す使い方。この場合、(1)の表す意外性が薄らぎ、非難、不本意、称賛といった積極的な感情はこの種の文からは感じられなくなる。事態の消極的容認とでも言うべきであろうか。便宜上、上記の(1)の使い方を「ながらA」、(2)の使い方を「ながらB」と下位分類することにする。次の(22)は「ながらA」の、(23)は「ながらB」の例である。

(22) せっかく八合目まで登りながら、登頂できなかった。

(23) ゆっくりながらとにかく完走した。

以下の節で二つの「ながら」を詳しく検討する。

2.2.1 ながらA

まず、「ながらA」について見ていこう。「ながらA」は、「のに」と同じように、意外、非難、不満、不本意、称賛などを表す。従って、これら二つの接続表現間で相互の置き換えができる場合も多い。(ただし、形容詞に後接する累加の用法は言えないようである。例：こんなに安いのに(*ながら) まだ値引きしてくれるの?)

(14') こんなに親切にして頂きながら、その上お土産まで頂いて
しまつて…

(15') 妻を病気で失いながら、更に財産までなくしてしまった。

(22') せっかく八合目まで登ったのに、登頂できなかった。

(24) 彼は、立派な大学を出ていながら、未だに就職できない。

出ているのに

(25) 日本人でありながら、日本の歴史も知らないなんて。

日本人なのに

しかし、「ながら」が表す意外や非難、不満などは「のに」ほど強くなく、文脈によっては、同時進行の意味、または「ながらB」の意味で解釈されることもある。第1章で示した(6)が非文文なのは同時進行の意味に解釈されてしまうことに依る。同じ文脈で(6)は非文だが(8')は言えるのはなぜか。「ながらA」のみでは十分に話者の主観が表現しきれず、適当な語句で意味を補わなければならないからであろう。「ながら」を使って「のに」と同じ位強い感情を示すには、(8)のように補わなければならないことが多いのである。江田(1985:146)は「ながら」について、「前件が起こる

ことによって当然こうなるだろうと予想されることが起こらない、或いは違うことが起こる場合に「Vながら」が使われる」と書き、「レインコートを買いながら着ない」という例を出して、この文がおかしいのは「レインコートを買うこと」と「着ない」こととの間に必然性や意外性が考えられないからおかしいのである」としている。しかし、(6)の「勉強すること」と「全然上手にならない」ことの間にも意外性が考えられないだろうか。問題は、前件と後件の語句にあるのではなく、それを結びつける「ながら」の性格にあるのではないだろうか。(6)を(8')のように「のに」に変えれば自然になり、また、江田の出した文も「レインコートを買ったのに着ない」にすれば自然になる、つまり、同じ文が「のに」を使えば可能になるということは、やはり「ながら」は「のに」ほど話者の主観を表わせず、適当な語句で補わなければ同時進行や「ながらB」の意味に解釈されてしまうことが多いことを示しているのではないだろうか。適当な語句、という大ざっぱな言い方をしたが、具体的には(8)のように後件の動詞述語に「～ている」「～ておく」等の補助動詞を加えたり(名詞、形容動詞述語の場合「～でありながら」の形を取る)、副詞を補うこととなる。

では、補助動詞や副詞で補いさえすれば、常に「のに」と言い換えられるのかというと、そうでもない。「ながら」の基本義は、二つの事態が同時に並行していることなので、(26)のように前件の動作、又は前件の結果の状態が後件に影響を及ぼさない、つまり、二つの事態の並存ではない場合には言い換えることができない。構文上の制約もある。(例：*「～はずながら」は言えない。また、前件と後件の主体は原則として同一でなければならない、など。)

(26) 結婚できと思っていたのに結婚できなかった。

*思っているながら

2.2.2 ながらB

次に「ながらB」について考える。「ながらA」は「～ていながら」「～ておきながら」「～でありながら」の形を取ることが多いが、「ながらB」は「ながらも」の形を取ることが多い。

(27) いけないと思いついながらも、つつい甘いものを食べてしまう。

(28) よくわからないながらもとにかく書いておいた。

(29) 貧しいながらも幸せな生活を送った。

(30) わずかながらも毎年給料が上がる。

(31) 新人ながらもなかなかの活躍だ。

上記の例のように、動詞だけではなく、形容詞 ((29) の文)、形容動詞 ((30) の文)、名詞 ((31) の文) にも接続するが、実際には「それ自体は少々低い評価を与えられるものが多く」(江田1985:151) (安い、汚い、狭いなど)、高い評価の言葉に接続することは少ない。

「ながら B」が「ながらも」の形を取ることが多いのは、同時進行や「ながら A」との区別を明確にするためであると考えられる。それは、「ながら A」が「～ている」や「～ておく」と共起することによって同時進行や「ながら B」との違いを明確化すると同様の働きであろう。江田 (1985: 153) は「ながらも」について、「前件と後件はこれかあれかでなく、これでもあるが同時にあれでもあるという関係なので、重なる部分が大きい例では「も」を取ると同時進行とも読める。」としているが、「ながら」は本来「これかあれか」ではなく、常に「これでもあるが同時にあれでもある」場合に使う表現である。よって、「ながら B」が「も」を取ると同時進行と紛らわしいのは、江田の言う「これでもあるが同時にあれでもある」せいではなく、「ながら B」が消極的容認という意味を担っているから、つまり、「のに」や「ながら A」のように正反対のものを結びつけて非難や不満、意外を表す用法を持たないからではないだろうか。消極的容認を表す「ながら B」はもちろん「のに」とは置き換えられない。

「ながら B」が「のに」とは用法が異なる (言い換えれば「ながら A」と分けた方がいいと考える) 一つの目安としては、このように、意外、非難や不満を表さないということと、もう一つ、「のに」と「ながら A」にはあった累加の用法がないということも挙げられる。「ながら B」は前件と後件を (+)-(+) か (-)-(-) でとらえる表現であり、(+)-(+), (-)-(-) という組み合わせには使えない。(肯定的意味を (+) で表し、否定的意味を (-) で表している。) 2.2.1 「ながら A」であげた (14') (15') の文は、常識的に考えて、事態の消極的容認とは受け止められない。

「ながら B」の用法は、次に述べる「ものの」の用法と似ており、両者を言い換えられる場合も多い。また、「～とは言いながら」という慣用表現もあるが、これも「～とは言うものの」と言い換えられる。これらの相互置換の条件などについては、次の「ものの」のところで述べることにす

る。

2.3 ものの

「ものの」は「用言及び「う・よう・まい」を除く助動詞の連体形に接続する。」(佐竹1984:92)「ものの」の基本的意味は、「前件の事柄を一応認めた上で、それとは対応しない、相反、矛盾した後件が次に展開する」

(森田1989:122)ことを表す。森田(1989:122)に更に私なりに付け加えれば、「ものの」の特徴は、前件の内容をプラス(マイナス)の評価を表すものとしてとらえ、それに対する後件の内容を反対にマイナス(プラス)の評価でとらえることではないかと思う。冒頭の(5)の文が不自然なのは、このプラスマイナスの関係が認められないからではないかと思われる。よい点とともに悪い点も認めて指摘する「含蓄のある語句」(佐久間1983:300)で、前件と後件の関係は(+)-(ー)または(ー)-(+)になることから、(ー)-(ー)、(+)-(+)になると不自然な文になる。つまり「ながらB」と同じく、「のに」の累加に相当する用法はないということである。2.1「のに」であげた(14)(15)の文も「ものの」にすると成り立たない。

(14)こんなに親切にして頂いたのに、その上お土産まで頂いて
しまつて… *頂いたものの

(15)妻を病気で失ったのに、更に財産までなくしてしまった。

*失ったものの

「一応の心組み、思ひなしを、一つ自問自答し反省してみると別の考え方もできる」(佐久間1983:300)ことを意味することから意外性は低く、「のに」「ながらA」のような強い非難、不満ではなく、遺憾、消極的容認を表す。意外性が低いということは、次の(32)(33)のように「やっぱり」「案の定」という再確認の意味の副詞と共に起しうるという点、逆に(34)のように意外性を強調するような語句を入れると不自然になる場合もあることからわかる。

(32)一応約束したものの、やっぱり行けなかった。

(33)来ると言っていたものの、案の定来なかった。

(34)? 固く約束したものの、驚いたことに彼は来なかった。

この「ものの」の用法は、「ながらB」と類似している。先の「ながらB」の例は全部「ものの」で言い換えられる。

(27')いけないと思うものの、つつい甘いものを食べてしまう。

(28')よくわからないものの、とにかく書いておいた。

(29')貧しいものの幸せな生活を送った。

(30')わずかではあるものの毎年給料が上がる。

(31')新人ではあるものの、なかなかの活躍だ。

しかし、「ながら」の基本的意味である二つの事態の並存が、「ながらA」と「のに」との置き換えで制約となったように、ここでも(35)のような、前件と後件が並存していないような場合に「ながら」を使うと些か不自然になるし、後件に意志、推量などが来ている場合、置き換えできない((36)参照)。

(35)勧められて食べたものの、あとで吐いてしまった。

?食べながらも

(36)嫌がっていたものの、多分やるだろう。

*いながら

また、「ながらB」は、いわゆる「結果の状態」を表す述語と結びつくと「～ていながら」となり、「ながらA」と紛らわしくなる。この「ながらA」との混同が、「のに」の持つ意味と同じ様な解釈を許すことになってしまうようだ。下の(37)の文は、「ものの」と同義の「ながらB」の文だが、ただそれだけを見れば普通「のに」の意味に解釈されてしまうであろう。

(37)その制度は日本に輸入されていたものの、なかなか実行されなかった。

いながら

更に、「ながらB」と「ものの」の間には、意味上だけでなく、構文上の制約もある。「ものの」では、題目提示の「は」も現れるし、丁寧形や過去形((38)参照)、「ようだ・らしい」などの助動詞にも接続しうる。

(佐竹1984:92) また、従属句内に、「から」などの南(1974:128)の言うC類従属句を含むこともできる((39)参照)。これらのことは「ながら」ではできない。おそらく南(1974:128)の分類に従えば、「ものの」も「ながら」も同じB類に属するのであろうが、「ながら」はA類に近いB類、「ものの」はC類に近いB類なのではないだろうか。つまり、「ものの」の方が「ながら」よりかなり独立性が高いということである。

(38)彼は毎日店を手伝いましたものの(*ながら)、頭の中では他のことを考えていたようです。

(39)もう年だからゆっくりではあるものの、大分上手になってきた。

* ゆっくりながら

「ものの」と「ながらB」は、それが持っている意味は似ているが、いろいろな制約、特に独立性に関する制約から言い換えられない場合が多いことがわかった。

ところで、「ものの」には「～とは言うものの」という慣用句のような使い方がある。「ながらB」にも「～とは言いながら」という表現がある。「ながらB」と「ものの」には置き換えにいろいろ制約があるが、これらの慣用表現になると制約が消え、完全に置き換え可能である。(佐久間(1983:300) 参照)

2.4 けれども

「けれども」の周囲には、「けれど」「けど」「が」があるが、これらは文体が違うだけで意味や機能は同じものと見なし、ここでは「けれども」に代表させる。

「けれども」は、今まで述べた四つの助詞の中でもっとも用途が広く、もっとも独立度の高いものである。南(1974:128)でもっとも独立度の高いC類に分類されているように、「けれども」は「う・よう・まい」などの推量の助動詞にも接続し、「おそらく・たぶん」といった陳述副詞も前件に生起する。「けれども」の意味は、森田(1980:135~136)によると、「逆接、対比、並列・累加、前置き、表現の婉曲、仮定条件を受けて、未定の事実や事実とは逆の事態を希望する気持ちを表すこと」となっている。これを見ると、逆接の接続助詞とは言うものの、佐竹(1986:163)のいうように、「それ(逆接)は用法の一部で、実際は逆接に収まらずもっと広い範囲で使われている」と言えよう。この、逆接以外の用法が多いという点が「けれども」の特徴であろう。

(40) 年は取っているけれども、なかなか元気だ。(逆接)

(41) 夏は日が高いけれども、冬は短い。(対比)

(42) 私が山田ですけれども、何かご用ですか。(前置き)

(43) イヤとは言いませんけれども…(婉曲)

(44) もっと頭が良ければいいんだけど…(希望)

「けれども」にこれだけ多くの用法があることは、この言葉が余り話者の主観を表さないということと無関係ではないだろう。そのため、「のに」が用いられるような強い非難、不満を表す文脈には現れにくい。

(10) 皆が働いているのに、一人だけ遊んでいるなんて。(非難)

?けれども

(12) 私にだってできるのにやらせてくれない。(不満)

?けれども

逆に、意外、非難、不満などを余り表すことのない「ものの」のほとんどは「が」「けれども」と置き換えることができるが、その逆はできない。」

(佐竹1984:92)「ものの」は単なる対比や前置きの用法はなく、「も」つばら逆接関係の表現に用いられるのである。」(佐竹1984:92) 佐竹(1984:92)は、「ものの」と「けれども」の違いを「(「ものの」では)前件と後件とを同じ重みで対比的に扱うのではなく、重点は後件にある。前件は後件に対して、一応これこれであるがと、留保・限定を付加的に提示するにすぎない。この点が「が」や「けれども」と少々ニュアンスの異なるところである。」と説明している。確かに、中立叙述的な対比を示す文では、「けれども」は前件と後件とを同じ重みで扱っていると言えるだろうが、先にも述べたように「けれども」の用法は多岐にわたっている。対比以外の用法でも、前件と後件が同じ重みと言えるのだろうか。佐竹の説で考えれば「ものの」と「けれども」の違いは重点の有無であるから、(5)が不自然で(7)が自然なのはその理由によるということになるが、筆者は(あとで検証するように)「ものの」も「けれども」も(対比的な使い方以外)重点の位置は後件にあると考える。とすれば、重点の有無では(5)が不自然で(7)が自然になる理由がつかない。筆者は、「ものの」と「けれども」の違いは重点ではなく、評価の有無の問題だと解釈する。「ものの」のところでも述べたが、「ものの」の特徴は、前件の内容をプラス(マイナス)の評価を表すものとしてとらえ、それに対する後件の内容を反対にマイナス(プラス)の評価でとらえて、遺憾、消極的容認を表すことだと考える。しかし、「けれども」はそういった(+)-(-)、(-)-(+という評価を必要としない場合が多い。微妙ながら、下の例文からもその違いが窺えよう。

(45) 山田さんは来たものの、田中さんは来るの?

(46) 山田さんは来たけど、田中さんは来るの?

(45)は「山田さんは来たけれども(それはそれでいいのだが)、田中さんは来ないんじゃないだろうか」という危惧が読みとれるが、(46)は「山田さんは来たけれども、田中さんは来るのだろうか、来ないのだろうか」と、単に来るのか来ないのかを問うているだけで、そこに話者の評価は読みと

れない。以上のように、「ものの」と「けれども」の違いを評価の有無という点から考えれば、(5)が不自然なのは上に述べたようなプラスマイナスの関係がないからであり、(7)が自然なのは、「けれども」にはプラスマイナスの関係は必ずしも必要ではないからと解釈できる。

因みに、坪根 (1996:44) は「ものの」は「のに」と同じように逆接を表すが、「のに」は疑問文にも全く問題なく使うことができるのに対し、「ものの」は疑問文には使えないと言う制限がある」とし、以下の例を挙げている。

(47) a. 日本に来た*ものの／のに富士山を見ていないのですか。

b. 日本に来たものの／のに富士山を見ていないのです。

しかし、上の(45)では「ものの」が疑問文で使われている。坪根 (1996:44) は、(47)が非文である理由を「これは「もの」が「一般的にこうだと話し手が思っていることを相手に訴える」性質があるため、相手のこと・相手の考えなどを尋ねる場合に使うと不自然になるのでであろう」と述べ、筆者 (坪根) が「ものの」の特徴としている「一般的に言って～だが～」という意味に反するからであるとしている。しかし、「一般的に言って～だが～」という意味を持つのは、逆接の接続表現すべてに言えることであり、特別「ものの」だけの特徴ではないのではないだろうか。「日本に来たのに富士山を見ていないのですか」というのも、「一般的に言って、日本に来ればみんな富士山を見に行くのに、あなたは見ていないのですか(どうして? 見ればいいのに)」ということの意味しているものであり、坪根 (1996:44) の言う理由で「ものの」が非文になっているとは考えにくい。筆者なりに(47)の非文性を考えてみると、話者が既に「(あなたが) 日本に来たこと、それはそれで結構だけれども、富士山を見ていないのは残念ですね。」と判断を下していることについて、敢えて相手に問うていることが不自然なのではないかと考えられる。「のに」が自然なのは、「日本に折角来たのに富士山を見ていないなんて良くない。どうして見ないんですか、見ればいいのに」と、相手に詰問、批判する用法があるからであり、「ものの」にはそういう相手を非難するような用法はないために不自然になるのだと思う。

3. 「のに」「ながら」「ものの」「けれども」の関係

これまで「のに」「ながら」「ものの」「けれども」の相互置換の可否と

その条件を考えることを通して、各々の意味と用法を述べてきたが、ここでこの四つの助詞の関係をまとめておこう。まず今までの考察から、「ながら」は、「のに」の用法に近い「ながらA」と、「ものの」の用法に近い「ながらB」に分けられる。そして「ものの」は、(それが常になにがしかの評価を伴うという点を除けば、構文上、そして、「のに」のように強い感情は表さないという点で)「けれども」に近いと言える。「ながら」が「ながらA」と「ながらB」に分けられる目安として、先に累加の用法があるか否かを挙げたが、ここでもう一つ、これらが前件と後件のどちらを焦点化する機能を持つか(つまり、佐竹(1984:92)が言う「重み」「重点」がどこにあるか)を調べることで、「ながら」を二つに分けることの妥当性と、四つの助詞の関係づけを再検証しようと思う。焦点がどこに置かれるかを調べる方法としては、今尾(1994)の方法を採用する。

まず、今尾(1994)の方法を簡単に述べておく。今尾(1994:150)は、焦点を「発話時の状況において、相対的に最も重要なあるいは際だった情報に相当する」部分と定義し、「のに」と「けれども」を取り上げて(今尾(1994)は「けれども」を「けれど」に代表させているが)、それらの強調・質問・修正・対照の焦点がそれぞれどこにあるかを検証している。ここでは、この内の強調・質問・修正の焦点について考えていくこととする。(注1)

3.1 強調の焦点

今尾(1994:151)は、強調の焦点を「話し手が最も重要な情報と見なし取り立てる要素」と定義した上で、それが前・後件のどちらにあるのかを探るために、(1)強意の「という」が付加できるか否か(2)後件が省略できるか否か(a. 後件の完全省略、b. 埋め込み文における後件の完全省略、c. 代動詞「だ」による後件の不完全省略)という方法を使っている。この(1)(2)が可能であれば、前件に焦点があることになる。このうち、強意の「という」が付加できるか否かという方法は、「ながら」「ものの」に、「とはいいいながら」「とはいいうものの」という慣用表現があり紛らわしく、ここでは適切でないと思われるので使用しない。

3.1.1 後件の完全省略

今尾(1994:155)は、次の(48)(49)の例を挙げて、「のに」は後件が省

略できるが、「けれども」はできないとしている。では、「ながら」「ものの」はどうであろうか。(() の中の…以下の言葉は省略された部分を表す。また、「ながら」が可能な場合、A・Bどちらの意味に解釈されるかを後ろに付記した。非文の場合は、どちらの意味に解釈しても非文なのであるから特に付記しなかった。)

- (48) a. 一郎：パパはもうその仕事はやっていないんだ。
 b. 正一：(びっくりして) どうして?!
 c. 一郎：別のお仕事にまわされたんだ。
 d. 正一：沖縄のお仕事がすまないのに?! (…別のお仕事に
 まわされた) *けれど
 *ながら / *ものの

- (49) a. お湯にお這入んなさらないからですよ。
 b. なに埃だよ。
 c. だって風もないのに。(…埃は立たない)

*けれど
 *ながら / *ものの

今尾 (1994:155) が挙げた例だけを見ると、「ながら」も「ものの」も省略はできないようである。しかし、「ながら」に関しては、文によっては可能なものもある。

- (50) 子供：試験、失敗しちゃった。
 母親：あんなに勉強していたのに!? (…だめだったなんて
 意外だ) していながら(A)

*していたものの / *していたけれど

(48) (49) が「ながら」を用いると非文になるのは、「ながら」が「～ない」に接続することは少ないということと、実際に「～ない」に接続する場合は大抵「ながらB」の意味になることが多いため、(48) (49) の文脈では意味的にもそぐわないという二つの理由からではないだろうか。だから、(50) のように意味的にも沿い、二つの事柄の並存を明示するというもっとも「ながらA」が現れやすい文では、出現可能になるのではないかと思われる。

3.1.2 埋め込み文における後件の完全省略

今尾 (1994:155) は、次の(51) (51') の例を挙げて、やはり「のに」は省略可能だが、「けれども」は不可能であるとしている。

(51') 妹は疲れた体で一生懸命勉強しているのに (…父が嫌みをいう) と思うと… *しているけれど

「ながら」は題目提示の「は」を取ることができないため、「妹が」の形に変えなければならない。そこを変えれば成り立ちそうな気もするが、やはりいささか不自然かもしれない。「ものの」は不可である。

今尾 (1994:156) は、次の (52) の例を挙げて「のに」は省略可能だが、「けれども」は不可能であることを示している。

*あったけれどだ

ここでも「ながら」は可能だが「ものの」は不可である。以上のことから、「ながら」は「ながらA」に解釈されるとき「のに」と同じく前件に強調の焦点が来るといって良さそうだが、「ものの」は「けれども」と同じく前件に焦点を持つてくることができないことがわかった。

今尾(1994:151)は、質問の焦点を「話し手と聞き手の情報較差を埋めるべく、話し手が聞き手に求める未知の情報を表す要素」と定義した上で、「のに」「けれども」に、新情報を表すものとしての疑問文が後続できるか否かでこの焦点が後件に置けるかどうかを検証している。次の例は今尾(1994:158)があげたもので、「けれども」は可能だが「のに」は不可能なことから、「けれども」は後件に質問の焦点を置けるが、「のに」は置けないとしている。

*あるのに／*ありながら／？あるものの

(54) (あなたは) 熱があるけれどどうしますか。

*あるのに／*ありながら／？あるものの

今尾 (1994:158) の例に「ながら」「ものの」を当てはめてみた。「ながら」が非文なのは問題ないと思う。「ものの」の場合は、(53)は「熱はあるものの (大したことはないから私は出かけても大丈夫だと思うけど、) 出かけますか」、(54)は「熱はあるものの (大したことはないけど) どうしますか (注射でもしておきますか)」という意味でなら発話可能である。つまり「ものの」は、先に述べたように、既に話者の判断があって、その上で相手に確認しているような文脈でなら使用可能であるが、単なる質問文としては言えないと思う。

3.3 修正の焦点

今尾 (1994:151) は、修正の焦点を「前提を修正する要素」と定義した上で、次の例を出して誤った前提の排除及び修正という二つのステップが可能かどうかを調べている。修正が可能であれば後件に焦点があることになる。

(55) a. 雨でも降っているの？

b. 雨は降っていないけど、みぞれが降っている。

*降っていないのに

*降っていないながら／*降っていないものの

今尾 (1994:159) は「のに」が非文なのは「「のに」に前節する要素は強調されやすいために、重要度が低いと見なした前件が強調されて、あたかも焦点であるかのような印象を与えるからであろう」とし、「けれども」は後件に焦点を置くことができるが、「のに」はできないとしている。「ものの」も上の例を見る限り非文であるが、次の文はどうであろうか。

(56) A: 雨でも降っているの？

B: いや、雨は降っていないものの、風は冷たそうだ。

(56) は自然な文だと思う。なぜ(55)の「ものの」は非文なのであろうか。

「ものの」は、前件と後件を(+)-(-)か(-)-(+)の関係でとらえ、良い点とともに悪い点も認める消極的容認の言葉である。確かに「雨が降っていない」ことと「みぞれが降っている」ことはプラスマイナスの関係ではあるが、「雨」と「みぞれ」は同類であることから、ある事柄のプラスの面とマイナスの面を述べると言うよりは、同じ一つのことをよく言ったり

悪く言ったりしているという矛盾した内容のように見えるからではないだろうか。筆者の語感では、「雨は降っていないけどみぞれは降っている」というのも少々不自然な気がする。普通は「雨じゃなくてみぞれが降っている」というところではないだろうか。とにかく、「ものの」は一応修正可能であるとしておく。

「ながら」も(55)の文では非文である。しかし、次の文はどうであろうか。

(57) A: あの子は親と引き離されて悲しまなかったの?

B: 悲しんだもののあきらめたみたいよ。

悲しみながらも(B)/けれども/*悲しんだのに

「ながら」は前にも述べたように、構文上の制約が多い。(55)(56)のような文の場合、前件と後件の主語が違うという点、また「～ない」につくことが少ないなどの点で不自然になっているとも考えられる。(57)のように、そういった制約を取り除いた文脈にすれば、非文にはならない。

以上のことを表にまとめると次のようになる。

	のに	ながらA	ながらB	ものの	けれども
後件の完全省略	○	○	×	×	×
埋め込み文での後件省略	○	?	×	×	×
「だ」による後件不完全省略	○	○	×	×	×
疑問文の後続	×	×	×	?	○
修正が可能か	×	×	○	○	○

上の表から、「のに」と「ながらA」は前件に焦点を置き、「ながらB」と「ものの」、「けれども」は一応後件に焦点を置いていると言えると思う。(ただし、対比の「けれども」の場合の、前・後件を同等に扱うものはここには入っていない。)

先の累加の用法と、この焦点化の機能の観点から検証して、「ながら」には二つの用法があること、そして二つに分けた内の「ながらA」は「のに」に近く、「ながらB」は「ものの」に近いということ、更に「ものの」(ということは「ながらB」も)はどちらかというと「けれども」に近い存在であるという関係づけは一応認められるのではないだろうか。但し、「ながらA」は「のに」ほど話者の主観を表し得ず、「ながらB」と「ものの」は評価の有無という点で「けれども」と違いがあり、それが冒頭の

(5) (6) の不自然さを生んでいると考えられるのは先に述べたとおりである。

まとめ：「ながら」には大きく分けて二つの用法がある

「のに」と「ながらA」は類似している

「ものの」と「ながらB」と「けれども」は類似している（但し、評価の有無という点では「けれども」は若干他と異なる）

4. 終わりに

以上四つの助詞を取り上げ、それらの使い分けの条件を考えつつ、その意味と用法、それぞれの関係を見てきた。本文でも見てきたが、節と節を助詞によって結びつける場合、ある助詞によってどういう節が結びつけられ、どういう節が結びつけられないか、また、ある節とある節は、どういう助詞では結びつけられ、どういう助詞では結びつけられないか、その結びつけられるか否かの違いは、意味上何によっているか、更に、その違いは逆接の接続助詞に広くあるものか否か、などについて、小稿の考察を端緒として、今回取り上げた助詞だけではなく、他のものも視野に入れながら、今後も更に検討を進めたいと思っている。

(注1) 今尾は、対象の焦点を調べるために、前件と後件の交換という方法をとっている。今尾は(58) (58')の例を挙げ、前件と後件に対する重点の置き方が同じではないために(58') cは不自然になるとし、「ここで話し手が主張したいのは「兄さんも馬鹿よ」であって「私も馬鹿です」ではない。前件と後件を対照させる場合、後件に焦点を置きたいときには「ケレド」が用いられる」と述べている。

(58) a. 「ホホホ兄さんは余っぽど馬鹿ね」

b. 「馬鹿だって糸公と同じ位な程度だあね、兄弟だもの」

c. 「おおいやだ、そりゃあ私は無論馬鹿ですわ。馬鹿ですけれども、兄さんも馬鹿よ」(虞, pp.155-156)

(58') a. 「ホホホ兄さんは余っぽど馬鹿ね」

b. 「馬鹿だって糸公と同じ位な程度だあね、兄弟だもの」

c. ? 「おおいやだ、そりゃあ私は無論馬鹿ですわ。兄さんも馬鹿ですけれども、私も馬鹿よ」

そして、「後件に対象の焦点を置く場合には「ノニ」を用いることはで

きない」として、(59)の文をあげている。

(59)* (私も) 馬鹿なのに、兄さんも馬鹿よ。

しかし、もし(59)の文が不自然である理由が、この文が内容的に後件に焦点がなければならぬため、前件に焦点を置く「のに」を使うと不自然になるとするのだとしたら、(59')のように前件と後件を交換すれば「のに」でも可能になるはずである。しかし実際には、(59')の文は不自然である。

(59')* 兄さんも馬鹿なのに、私も馬鹿よ。

ということは、この例で「のに」が不自然になるのは焦点化の問題ではなく何か他の要因によるものと思われる。このように、前件と後件の交換という方法は、焦点化以外の要素が入ってくる可能性があると考えたため、ここでは使わなかった。

参考文献

- Makino, Seiichi and M. Tsutsui (1995) "nagara (mo)" *A DICTIONARY OF INTERMEDIATE JAPANESE GRAMMER*, The Japan Times.
- 今尾ゆき子(1994) 「『ケレド』と『ノニ』の談話機能」『世界の日本語教育』4
- (1994) 「条件表現各論-ガ／ケレド／ノニ／クセニ／テモ-談話語用論からの考察-」『日本語学』13-8
- 江田すみれ(1985) 「逆接『ながら』の意味と用法について」『I L T NEWS』78
- 佐久間鼎 (1983) 「接続助詞 (その二)」『現代日本語法の研究』復刻第1版 くろしお出版
- 佐竹久仁子(1984) 「～もので／～ものの／～ものを」『日本語学』3-10
- (1986) 「『逆接』の接続詞の意味と用法」宮地裕編『論集日本語研究(1) 現代編』明治書院
- 坪根由香里(1996) 「終助詞・接続助詞としての『もの』の意味 - 『もの』『ものなら』『ものの』『ものを』 - 」『日本語教育』91号
- 前田直子 (1993) 「逆条件文『～テモ』をめぐる」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

- (1995) 「ケレドモ・ガとノニとテモ-逆接を表す接続形式-」
宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）
複文・連文編』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 1～3』角川書店
- (1988) 『日本語の類意表現』創拓社
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク

The usages of "NONI", "NAGARA", "MONONO", "KEREDOMO"

IKEGAMI Motoko

I describe the meanings and usages of "NONI", "NAGARA", "MONONO", "KEREDOMO" in this paper considering how to use properly them. After that, I define their mutual relationships by the view of the focus.

"NAGARA" has two usages. One of them resembles that of "NONI", I call it "NAGARA (A)" in this paper. The other resembles the usage of "MONONO", I call it "NAGARA (B)". "KEREDOMO" also resembles "NAGARA (B)", "MONONO", except that "KEREDOMO" doesn't imply estimations necessarily.

Finally, by using of Imao's (1994) means, I verify the position of their focus on the point of view "emphasis", "question", "correction". By which, I prove that "NONI", "NAGARA (A)" focus on the antecedent while "NAGARA (B)", "MONONO", "KEREDOMO" do on the consequent, and confirm the appropriateness my classification, that is, "NAGARA (A)" resembles "NONI", and "NAGARA (B)" resembles "MONONO" and "KEREDOMO".